

## 生活科学科生活デザイン専攻 令和2年度一般入試

### 【出題意図】

課題文では、ユニバーサルデザインの7つの原則のうちの1つ「使う際に身体的な負担が少ないこと」について、事例を挙げて示されている。

問1では、文中で事例として取り上げられている「高速道路のETC」について説明させることにより、課題文の内容をどれだけ理解しているか確認することを意図している。

問2では、この課題文を理解したうえで、自分なりにこのような事例を挙げて、その事例について論じてもらうことを意図している。論じるにあたって適切な事例を挙げる必要があり、自分の周囲の環境を、どれだけ興味を持ってみているかが鍵となる。

### 【採点基準】

理解力、論理力、思考力、表現力を中心として総合的に評価します。

特に、令和2年度の問題では、以下の点を採点の際のポイントとします。

- ・ 課題文の内容を読み取り、理解できているか。
- ・ 論じるにあたって適切な事例が例示されているか。
- ・ 取り上げた事例が、4つの項目のうちのどれに該当するか示されているか。
- ・ 取り上げた事例について、工夫してある点を適切に説明できているか。
- ・ そのうえで、自分の論を展開できているか。

### 【問1：解答例】

- ① 高速道路の ETC を通過する際には、停車させる、窓を開ける、通行券を受けとる、料金を支払う等の動作をする必要がなく、文中の「反復行動を最小限にする」という面でユニバーサルデザインだと言うことができる。 (99文字)
- ② 高速道路の ETC を通過する際には、車を停車させる、窓を開ける、通行券を受けとる料金を支払う等の動作をする必要がないため、繰り返しの動作を軽減するという面でユニバーサルデザインだと言うことができる。 (98文字)

### 【問2：解答例】

- ① 自分の身近な生活のなかで「使う際に身体的な負担が少なくなるようにデザインされている事例」として、自分の住んでいる家と、祖父が住んでいる家を比較して論じる。自分が住んでいる家は5年前に建てられたものである。祖父が住んでいる家は、父が子どもだった頃に建てたと聞いているので、40年ほど前に建てられたものである。

祖父の家のドアのノブは、丸い形をしていて、手で握ってひねって操作をするかたちのものである。ひねる時はノブをしっかり握らなければならず、けっこう力が必要だと感じる。一方、私の家のドアのノブは、横長のレバーのかたちをしている。レバーの先端を下に下げるという動作のみで開閉でき、ひねる形のノブよりも少ない力で操作できる。このような、レバー型のドアのノブは、課題文の■で示された4つの項目のうち「操作では、無理のない力で利用できるようにする」という項目に当てはまると考える。

このようなレバー型のドアのノブは、握ってひねるものと比べると、力のない子どもにとってもお年寄りにとっても、使いやすいものだろう。また、ひねる動作よりも単純な動作ですむので、荷物を持っていて両手がふさがっている時などは、肘で操作することもできるため、便利である。このようなメリットがあるため、最近の建物のドアノブには、レバー型のもが増えてきているのではないかと思う。

以上のことから、私は、いろいろなものを、使う際に身体的な負担が少なくなるようにデザインすることは、できるだけすべての人々が利用しやすくなる「ユニバーサルデザイン」を実現するうえで、重要な視点だと考える。(668文字)

- ② 自分の身近な生活のなかで「使う際に身体的な負担が少なくなるようにデザインされている事例」として、自分の家の車を例にして論じる。

私の家には、自動車が2台ある。1台は父の専用の車であり、もう1台は、父と母の両方が運転する車である。父の身長が183cmで、母の身長は158cmで、身長が25cm

違う。そのため、母がこの車を運転する際には、まず、運転席のシートを前にずらし、座る部分の高さを上に上げる。さらに、ハンドルの角度を変え、バックミラーの角度を自分の視点に合わせて調整し、それから運転を始める。このように、位置や高さを調整できるシートやハンドルなどは、課題文の■で示された 4 つの項目のうち「ユーザーが無理のない姿勢で操作できる」という項目に当てはまると考える。

このように、位置や高さや角度を調節できるということは、身長の高い人でも低い人でも同じように使いやすいものだろう。このことは、使いやすさだけでなく、安全運転にもつながるはずである。他のものについて考えてみると、私が使っている学習机なども同じ考えがあてはまる。机も椅子も高さを調整できるため、小学校入学時から、何度か高さを高くしながら、これまでずっと使ってきている。子どものように、毎年身長が少しずつ大きくなることに対応する場合にも、位置や高さを調節できることは有効だと思う。

以上のことから、私は、いろいろなものを、ユーザーが無理のない姿勢で操作できるようにデザインすることは、できるだけすべての人々が利用しやすくなる「ユニバーサルデザイン」を実現するうえで、重要な視点だと考える。（670文字）

令和2年度一般入試 食物栄養学専攻

「国内の男性における喫煙率，肺がんの死亡率，肺がんの年齢調整死亡率の年次推移」

【出題意図】

- 問1. 提示された折れ線グラフについて，3つのデータがそれぞれどういったことを示しているのか，およびそれぞれを関連付けて説明できる思考力，文章を簡潔にまとめられる表現力を評価することを意図している。
- 問2. 提示された資料，およびこれまで保健分野においてこれまで学んできた喫煙が健康に及ぼす影響に関する知識を活用して自分の考えを示す技能および思考力，誤字・脱字がなく自分の考えをわかりやすく伝えられる表現力を評価することを意図している。

【採点基準】

問1

- ✓ ①男性喫煙率が年々低下している傾向にあること，②男性肺がん死亡率が年々上昇している傾向にあること，③男性肺がん年齢調整死亡率が近年低下している傾向にあること，④男性喫煙率は下がっているものの男性肺がん死亡率は上昇している傾向にあること，⑤男性喫煙率が下がっていくにつれて男性肺がん年齢調整死亡率の上昇が抑えられて近年低下している傾向にあること，の5点に触れているか。触れていない場合は減点する。(思考力)
- ✓ わかりやすく簡潔な文章にまとめられているか。(表現力)

問2

- ✓ これまでに学んだ喫煙に関する知識（肺がん，肺以外の部位のがん，呼吸器疾患，生殖機能の低下，依存症などのリスクの上昇）を挙げながら，題材に対する自分の考えを述べることができているか。(知識)
- ✓ 図の内容と禁煙を進めることの是非に関する自分の主張を適切に関連付けながら，考えを述べるができているか。(技能・思考力)
- ✓ 誤字・脱字なく，考えをわかりやすく伝えることができているか。(表現力)

【解答例】

問 1.

男性喫煙率は 1965 年以降一貫して低下していく傾向があるのに対して、男性肺がん死亡率は一貫して上昇する傾向にある。男性肺がん年齢調整死亡率は、1990 年代までは上昇する傾向にあったが、近年は上昇が抑えられて徐々に低下している。データ間の関連性に着目すると、男性肺がん死亡率は男性喫煙率が低下していくにしたがって上昇している傾向がある。一方で、男性肺がん年齢調整死亡率は男性喫煙率が低下していくにつれ、一時は上昇していたものの、近年は低下している傾向にある。(225 字)

問 2.

資料を見ると、喫煙率の低下に伴って年齢調整死亡率の上昇が抑えられていることがわかる。喫煙は長い時間をかけて健康に悪影響を及ぼすことから、肺がんの年齢調整死亡率をさらに下げるためには、禁煙は今後も積極的に推進していく必要があると私は考える。私はこれまで学校における保健科の授業において、喫煙は肺がんリスクを高めるため、喫煙は避けるべきであることを学習してきた。また、喫煙は肺だけではなく他の臓器のがんの危険因子であることに加え、副流煙によって喫煙をしていない者にまで健康被害を及ぼすことが懸念されている。がんは、日本における死因の上位に位置しており、健康水準を向上させるためにはがんの予防は必須事項である。さらに、喫煙は依存性が強いため、特に若い世代においては喫煙を始めない、または早期に禁煙を始める必要があるといえる。以上のことより、禁煙は今後も推し進められていくべきであるといえる。(392 字)